

# アメリカ中学校家庭科教科書から見た 「家族関係」の一考察（第2報）

瀧本麻衣\*・入江和夫

A Study of "Family Relation" in the American Textbook of Homemaking Education (Part2)

Mai TAKIMOTO & Kazuo IRIE

(Received September 30, 2005)

## I はじめに

家族問題が多発している。それは家族のあり方に起因すると考えられる。平成10年中央教育審議会は「幼児期からの心の教育の在り方」<sup>1)</sup>を答申した。そこには、特に人間関係構築の必要性、コミュニケーション能力の育成が重要視されている。著者らは家族関係を扱う家庭科がこのような教育を行う教科として最も適切ではないかと考えた。しかし、現在の日本の家庭科教科書は家族関係に関する内容が乏しい。

家庭科とは戦後、アメリカ教育使節団がかかわって誕生した教科である。昭和22年の学習指導要領家庭科編（試案）の『はじめのことば』<sup>2)</sup>では「この教育は家庭内の仕事や、家族関係に中心を置き」とあり、目標では「家庭において（家族関係）自己を成長させ」とある。このことはアメリカの家庭科教育が家族関係を重視していることが背景にあるのではないかと考えられる。

そこで、日本の家庭科において家族関係をより充実させるための参考として、最新のアメリカ家庭科教科書『Building Life Skills』について注目した。前報ではこの教科書の「成長と変化」、「あなたの個性」、「直面していることへの挑戦」<sup>3)</sup>の章について、日本の中学校家庭科及び保健体育と比較した。その結果、アメリカ家庭科教科書では中学生が悩む多くの問題とその具体的な解決方法があり、積極的なコミュニケーションによる他者理解が必要であることが示されていた。

今回、我々は前述と同じようにこの教科書中の「他の人とのコミュニケーション」、「家族」、「友達」の章について内容を要約し、日本の家庭科教科書及び保健体育教科書と比較するとともに人間関係構築の観点から日本の中学校家庭科の授業を構想していく。

## II 方法

1. 分析した教科書：Louise A.Liddell & Yvonne S.Gentzler 「Building Life Skills」<sup>4)</sup>、東京書籍「新しい技術・家庭（家庭分野）」<sup>5)</sup>（以下KTとする）、開隆堂「技術・家庭（家庭分野）」<sup>6)</sup>（以下KKとする）、大日本図書「中学校保健体育」<sup>7)</sup>（以下HDとする）、東京書籍「新

キーワード：家族関係、家庭科教育、中学校

\* 山口大学大学院教育学研究科

しい保健体育」<sup>8)</sup> (以下HTとする)

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 日米の教科書の精神的機能の内容の比較

ここでは米国教科書の単元「自分自身について学ぼう」の中の「他者とのコミュニケーション」、「家族」、「友達」の章を取り上げる。

##### 1) 「他者とのコミュニケーション」<sup>9)</sup> について

この章は大項目(1)「言語コミュニケーション」(2)「非言語的コミュニケーション」(3)「良いコミュニケーションへの障害」(4)「コミュニケーション能力を發展させること」(5)「衝突を解決すること」からなり、これらはそれぞれ小項目がある。その内容について、どのような方法でコミュニケーションをとるのかを視点にして抽出し、これに該当する内容を日本の家庭科教科書<sup>5) 6)</sup>と保健体育教科書<sup>7) 8)</sup>から抽出し、記号(例KT-p178)と内容を表1に示した。

表1 アメリカ教科書 第4章「他者とのコミュニケーション」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	他者との関係とその構築方法	日本教科書 該当項目
アメリカ	第4章 「他者との コミュニケーション」	言語 コミュニケーション	話すこと	話す能力は生まれつき持っているわけではないがすぐにコミュニケーションの仕方を学ぶ。何を言っているかわからないと言われたときは、話し方をテープに録音したほうが良いかもしれない。中学生の俗語は大人には通用しないので使わない方が賢明である。はっきりとした声で話すこと、大声過ぎず、あまりゆっくり過ぎず、聞き手の注意を失わないようにしなさい。	なし
			書くこと	コミュニケーションするのに用いられる言葉は話すだけではなく、書くことでも使われる。情報というのは書かれた言葉を通して他者に送られる。本や新聞に書かれた言葉によって多くのことを学習できる。あなたは手紙を書くことによって個人的なメッセージを伝えることができる。例えば、友達や家族やずっと会っていない人に手紙を送ることはとても良いことである。仕事を成功させるためにも書くことは必要であり、はっきり話すように簡単に理解してもらえらるメッセージをはっきり書きなさい。そうしたら、あなたはあなたの筆跡がわかる人が欲しいと思うし、正しい文法を使い、誤字をしたくないと思うだろう。書き始める前に何が言いたいかを考え、キーポイントを走り書きしなさい。アウトラインができていれば簡単に言葉が見つかるだろう。	なし
		非言語 的コミュニ ケーション	容姿・ 身支度	人々があなたの第一印象に興味を失えば、知り合う機会は得られない。自分が言葉で話す前に、自分の容姿が相手にメッセージを届けてしまう。相手はあなたが魅力的かどうか、洋服が似合っていてきれいかどうか気に気づく。このような理由から君は自分の容姿を送りたいメッセージを考える必要がある。良い身支度というのは自分自身をケアできているかを意味する。そのため、髪を整えたり、歯を一日二回磨いたり、髭を剃りなさい。このような身支度は相手から魅力的に見られる。もし、あなたが身支度を整えなければ、あなたの良い容姿が相手に伝わらず自分自身についての積極的なメッセージが伝える機会を失うかもしれない。	なし
		ボディ ランゲ ージ	ボディランゲージとは体の動きを使いメッセージを送ることであり、ジェスチャーや顔の表情や態度等である。ボディランゲージの大切なものにアイコンタクトがあり、ちゃんと目をみて聞くことが大切である。態度はあなた自身がどう思っているかを人に伝えることになる。また、相手に状況をどう感じているかを伝える。もし、いすにまっすぐ座っているならば、言われていることに興味を持っていると示唆することができる。一方、猫背で椅子に座り腕組みをしていたら興味が欠如しているようにコミュニケーションしていることになる。人が伝達するメッセージは時々その人が送りたいメッセージでないことがある。例えば、他の人と話さない友達は傲慢で冷淡な人だとおもわれるかもしれない。しかし、たぶん彼女はシャイなだけである。頭を机の上に置いているクラスメートがいたとき、彼はうんざりしているように思われるが、病気のなのかもしれない。人が出しているボディランゲージに注意深く気づきなさい。しかし、ボディランゲージを基準にして判断してはいけない。あなたは誰かがどう感じているのかを本当にわかるために、言語コミュニケーションを使う必要があるかもしれない。	なし	
		良いコ ミュニ ケーシ ョンへ の障 害	複雑な メッセ ージ	送られるメッセージが多かったり、様々な方法で受け取ったりすると相手は理解できなくなる。友達が問題を抱えていた場合やどこか調子が悪いと感じ相手に聞いてみると大丈夫だと答える場合は相手が複雑なメッセージを送っていることになる。このような場合、相手は君に話したくないことを意味している。	なし

			相違点	自分自身ととても良く似ている人とコミュニケーションをとることは容易である。それは同じ信条や意見を分かち合っているからである。あなたと全く違う価値観や信条の人と出会ったとき、相手の考えや感情が理解することが難しいかもしれない。他人がなぜそのように考えたり思ったりするのか理解することは難しい。このようなことを理解することがよいコミュニケーションになる。	なし
			ステレオタイプ	ステレオタイプは集団のすべての人が同じであるという固定化された概念である。それは性別・年齢・人種・仕事・文化・宗教・容姿をもとに形成される。ステレオタイプを変えることは難しい。長い年月を経て形成されるからだ。これは理解の欠如から生じる。集団の一員として、人の意見を形作る代わりにそれぞれの人だと独立させて見なさい。ステレオタイプは良いコミュニケーションの障害になり得る。	なし
			コミュニケーションの能力を発展させること	はつきりしたメッセージを送ること あなたがはつきりとメッセージを送るときに良いコミュニケーションが生じる。はつきりとメッセージを送るための方法が6つある。1) 話す前に考えなさい。2) 明確で簡潔な方法であなたの主張を通しなさい。3) ほかの人の感情を考えなさい。4) 音の調子を見なさい。5) アイコンタクトを維持させなさい。6) 会話の技術を発展させなさい。マナーは上品な振る舞いの物差しである。これは非言語的コミュニケーションであり、良いマナーは人を快適な気持ちにさせる。もし、新しい友達がグループに入ったならば自己紹介をし、喜んで受け入れなさい。あなたの後ろの人のためにドアを開けたままではない。喜んできや「ありがとう」という言葉を忘れてはいけない。早いうちにマナーを学ばば学ばほどはつきりとしたメッセージを送ることが始められる。	なし
			積極的に聞き手に回ること	あなたは積極的な聞き手になることによって、はつきりとメッセージを受け取ることができる。積極的に聞き手に回る6つの方法がある。1) 話していることを言い換えなさい。2) 話し相手に自分は聞いているというシグナルを与えなさい。3) 自分が受け取ったメッセージが不明確ならば尋ねなさい。4) 回答する前にまず聞きなさい。5) 話し相手が言い終わるまで邪魔をしてはいけない。6) 話し手が言っていることは何かを考え、心に焼き付けなさい。	なし
			衝突を解決すること	衝突とは人間関係の中でお互いに承諾できないことや問題があることだ。君がはつきりとした良いコミュニケーションをするとしても衝突は起こる。家族や友達と一緒にいる時間が多いだけに、衝突しやすい。衝突を防ぐためにあなたの考えや感情をはつきりと伝える必要がある。もし衝突したときの解決方法として、調停者を立てることや折衷案を出すことが効果的である。また、ポジティブな自己概念を維持するために衝突を解決する方法は5つある。1) 自分が気がかりなことを声に出しなさい。だまり続けることは何の解決にならない。2) 問題は何かを明確にしなさい。3) 相手の言い分を聞きなさい。4) 考えられるだけの解決策を提案しなさい。5) 衝突を解決するために時間をかけ、忙しい時に衝突をすることは避け、討論として扱いなさい。	なし
日本家庭科KT	なし	なし	なし	なし	なし
日本家庭科K	なし	なし	なし	なし	なし
日本保健体育HD	なし	なし	なし	なし	なし
日本保健体育HT	なし	なし	なし	なし	なし

### (1) 「言語コミュニケーション」

「言語コミュニケーション」とは、言葉を使って情報を送ることであり、「話すこと」、「書くこと」の小項目から成っている。

#### i) 「話すこと」

ここでは、「話す能力は生まれつき持っているわけではないがすぐにコミュニケーションの仕方を学ぶ。」「何を言っているかわからないと言われた時は、話し方をテープに録音したほうが良いかもしれない。」「中学生の俗語は大人には通用しないので使わない方が賢明である。」「はつきりとした声で話すこと、大声過ぎずあまりにもゆっくり過ぎず、聞き手の注意を失わないようにしなさい。」とあり、話すことはコミュニケーションの基本になるということに気づかせる授業実践を展開したい。例えば、話す能力のない赤ちゃんは音でコミュニケーションをとっている。そこで、中学生に泣いたり笑ったりという音を使って相手にコミュニケーションができるか体験させる。その後、「まんま」や「しっこ」等の単語を使うことができるという条件にし、次に、2・3語言葉を話せるという条件に変え、段階的にコミュニケーションの取り方

を変えていく。伝えたいことを正確に伝えるためには言語が必要であることや、早く話す人や遅く話す人などを設定し、話すスピードも大切であることに気づかせたい。

## ii) 「書くこと」

ここでは、「コミュニケーションするのに用いられる言葉は話すことだけでなく、書くことでも使われる。」「書き始める前に何が言いたいかを考え、キーポイントを走り書きしなさい。アウトラインができていれば簡単に言葉が見つかるだろう。」とあるように、書くことの意義や具体的な方法のマニュアル化がなされ、体系的にまとめられている。そこで、家庭科において家族関係の領域で普段、家族には言えないことや感謝の気持ちを手紙にし、それを家族に送るという授業展開をしたい。相手に話すことができない場合に、書くというコミュニケーションの方法があることを知らせたい。また、模擬家族を設定し、手紙をもらった人や受け取った人の気持ちや、書くことの意味を考えさせ、言語コミュニケーションのツールとして、書くことが話すことと同様に大切であることを理解させたい。

## (2) 「非言語的コミュニケーション」

「非言語的コミュニケーション」は、言葉を使うことなしにメッセージを送ることを意味し、「容姿・身支度」、「ボディランゲッジ」の小項目から成る。

### i) 「容姿・身支度」

ここでは、「人々があなたの第一印象に興味を失えば、知り合う機会は得られない。」「自分が言葉で話す前に、自分の容姿が相手にメッセージを届けてしまう。」「良い身支度というのは自分自身をケアできていることを意味する。そのため、髪を整えたり歯を一日二回磨いたりひげを剃りなさい。このような身支度は相手から魅力的に見られる。」「もし、あなたが身支度を整えなければあなたの良い容姿が相手に気づかれず自分自身についての積極的なメッセージを伝える機会を失うかもしれない。」とあり、言語コミュニケーションをする以前に容姿や身支度がコミュニケーションをとっていることを学ばせている。身支度と言えば、日本の家庭科教科書の单元名「衣服の働きを考えよう」に「衣服の着方はTPOに応じて」という記述がある。しかし、これは目的に応じた服装の注意事項であり、これらがコミュニケーションのツールになることを示していない。授業展開を考えると、ジーンズやサングラスや帽子やスーツなどを用意し、会話の相手を親や友達や教師などに設定し、コミュニケーションをとりたいと思うか思わないかを考えさせ、第一印象である容姿が非言語的コミュニケーションになることを理解させたい。また、晴着を着た女性やネクタイの色を見て、どのようなことが読みとれるかを考えさせ、容姿はその人の考え方を相手に伝えていることを学ばせたい。個性を表す容姿や身支度が、非言語的コミュニケーションのツールとなることや、第一印象をよくするための容姿・身支度ができる力を身につけさせたい。

### ii) 「ボディランゲッジ」

ここでは、「ボディランゲッジとは体の動きを使いメッセージを送ることであり、ジェスチャーや顔の表情や態度等である。」「ボディランゲッジの大切なものにアイコンタクトがあり、ちゃんと目を見て話し、聞くことが大切である。」「人が伝達するメッセージは時々その人が送りたいメッセージではないことがある。例えば、新しい友達が他の人とは話さない冷淡で傲慢な人だというメッセージを伝えるかもしれない。たぶん彼女は本当はただシャイなだけである。頭を机の上に置いているクラスメイトがいたときに、彼はうんざりしているというメッセージを送っているかもしれないが、彼は病気かもしれない。」「ボディランゲッジを基準にして判断してはいけない。あなたは誰かがどう感じているかを本当にわかるために言語コミュニケーショ

ンを使う必要があるかもしれない。」とある。ここでは、何気ない態度や顔の表情が、コミュニケーションの一つであることを再確認させ、アイコンタクトや態度の具体例を提示している。目を見て話すことは、相手の表情を読みとり、自分の発言に対する反応をフィードバックさせながらコミュニケーションをすることである。家族関係の領域でよくロールプレイングをさせて家族の気持ちを考えさせることがある。そこで、これをする時に、アイコンタクトをしない人を設定し、気持ちがわかるかという授業を展開したい。バスケットボールでは、アイコンタクトをしながらパスを出したり、横断歩道では運転手とアイコンタクトをして安全を確かめたり、日常、アイコンタクトを使用していることに気づかせたい。非言語的コミュニケーションのツールとして、アイコンタクトがあり、必要な場面でこれができる力を身につけさせたい。

### (3) 「良いコミュニケーションへの障害」

明確なコミュニケーションをすることはいつも簡単であるとは限らない。コミュニケーションの過程には多くの障害があり、これらを避ける方法がこの大項目で述べられている。ここには小項目「複雑なメッセージ」、「相違点」、「ステレオタイプ」がある。

#### i) 「複雑なメッセージ」

この中に「送られるメッセージが多かったり、様々な方法で受け取ったりすると相手は理解できなくなる。」「自分の友達が問題を抱えていた場合やどこか調子が悪いと感じ、相手に聞いてみると大丈夫と答える場合は相手が複雑なメッセージを送っていることになる。このような場合、相手は君に話したくないことを意味している。」とあるように、複雑なメッセージを送られた場合や送る場合の注意事項が具体的に書かれている。授業を考えると、教室の中で顔に傷をつけた友達を設定し、会話をしてもらおう。「どうしたの?」と「何でもないよ。」は相反する2つの複雑なメッセージである。顔に傷があるメッセージと話したくないというメッセージである。これに対してどのような対応をするのか考えてもらおう。そうすることで、見ただけではメッセージを正確に読みとることができないことを実感させたい。このようなメッセージを読みとり、人の気持ちまでも推測する能力を身につけさせたい。

#### ii) 「相違点」

ここでは、「自分自身ととても似ている人とコミュニケーションをとることは容易である。それは同じ信条や意見を分かち合っているからである。」「あなたと全く違う価値観や信条の人と会った時、相手の考えや感情を理解することが難しいかもしれない。」「他人がなぜそのように考えたり思ったりするのか理解することは難しい。このようなことを理解することが良いコミュニケーションになる。」とあるように、人間関係を構築するためにぶつかる壁を説明し、中学生が悩む課題を具体化している。授業展開は自分と違う考え方をする人に対して、どういう対応をするのか考えさせる。そうすることによって、自分自身を理解することも大切だが、他者を理解することも大切であると気づかせたい。他者との相違点は当たり前のことであり、それを受け入れることで、コミュニケーションの壁がとり除けることを理解させたい。

#### iii) 「ステレオタイプ」

この中で、「ステレオタイプとは集団の全ての人と同じであるという固定化された概念である。それは、性別・年齢・人種・仕事・文化・宗教・容姿をもとに形成される。」「ステレオタイプを変えることは難しい。長い年月を経て形成されているからだ。」「集団の一人として人の意見を形作る代わりにそれぞれの人だと独立させて見なさい。これは良いコミュニケーションの壁になり得る。」とある。ステレオタイプは、メディアなどによって知らない間に刷り込まれている場合がある。日本でのステレオタイプの具体例を家庭科とリンクさせて授業を展開させた

い。ジェネレーションギャップという言葉があるが、それは年齢差があることによって考えや行動が理解できないことである。高齢者は運動能力が低下し、運動をできないというステレオタイプに対して、高齢者が運動をしているテレビのコマーシャルを見せたり、実際に会話をしてもらうことで年齢差によって、行動や考え方が理解できないことはないことを実感させたい。

#### (4) 「コミュニケーションの能力を発展させること」

大項目「コミュニケーションの能力を発展させること」は小項目「はっきりしたメッセージを送ること」、「積極的に聞き手に回ること」から成る。

##### i) 「はっきりしたメッセージを送ること」

ここでは、「はっきりとメッセージを送るための方法は6つある。\*話す前に考えなさい。\*明確で簡潔的な方法であなたの主張を通しなさい。\*他の人の感情を考えなさい。\*音の調子をみなさい。\*アイコンタクトを維持させなさい。\*会話の技術を発展させなさい。」とあり、前述した内容が体系的にまとめられている。また、「コミュニケーションを改良する方法の一つに良いマナーを使うことがある。これを使うことによってあなたは他の人の気持ちを気遣っているというメッセージを送ることになる。これは良いコミュニケーションになる。」とあり、早い時期から時間をかけて修得する方法がマニュアル化されている。一方、日本の家庭科教科書では楽しい食事をするためにマナーの注意を促しているだけである。授業展開を考えると、調理実習だけに重点を置くのではなく食事のマナーに重点を置いた実習にすれば、調理実習がマナーを学ぶ場となる。また、疑似家族を作り、食事中にテレビを見ていたり、携帯を使用していることがコミュニケーションの障害となることを体験させたい。食事中のマナーがコミュニケーションのツールになることを、家庭でも実践させたい。

##### ii) 「積極的に聞き手に回ること」

ここでは、「あなたは積極的な聞き手になることによって、はっきりとメッセージを受け取ることができる。」「積極的に聞き手に回る6つの方法がある。\*話していることを言い換えなさい。\*話し相手に自分は聞いているというシグナルを与えなさい。\*自分が受け取ったメッセージが不明確ならば尋ねなさい。\*回答する前にまず聞きなさい。\*話し相手が言い終わるまで邪魔をしてはいけない。\*話し相手が言っていることは何かを心にとめ、焼き付けなさい。」とある。日本の家庭科教科書で、家族がどのような気持ちで話しているのかと考えさせる記述があるが、どのような気持ちで聞いているのかを問う項目はない。積極的に聞き手に回ることの方法を実際にロールプレイングさせたい。話し手の言うことを聞いているというシグナルを送る積極的な聞き手とそうでない人を設定し、前者の大切さを実感させたい。このことがコミュニケーション能力の改善になることを理解させたい。

#### (5) 「衝突を解決すること」

ここでは、「家族や友達と一緒にいる時間が多いだけに、衝突が生じやすい。」「衝突を防ぐためにあなたの考えや感情をはっきりとコミュニケーションする必要がある。」「もし衝突した場合、解決方法として、調停者を立てることや折衷案を出すことが効果的である。」「衝突を解決する方法が5つある。\*自分が気がかりなことを声に出しなさい。だまり続けていることは解決にならない。\*問題は何なのかを明確にしなさい。\*相手の言い分を聞きなさい。\*考えられるだけの解決案を提案しなさい。\*衝突を解決するために時間をかけ、忙しいときに衝突を持ち出すことは避け、討論として扱いなさい。」とある。家庭科の授業において、解決方法を実際に演じさせてみたい。疑似家族を設定し、親子や兄弟間の衝突に対して自分はどのように解決をするのかを確認させたい。衝突が生じても解決できれば、これを恐れることなしに自

分の行動ができるはずである。衝突が起こることは当たり前のことであり、そうなったときにどのように解決したら良いのかを学ばせたい。

## 2) 「家族」<sup>10)</sup> について

この章は「家族とは多くの人の人生の中でとても大事な役割を果たす。」という一文から始まる。家庭内暴力・虐待・育児放棄など日本の今日的課題の中で家族に関する問題は少なくない。しかし、家族関係を扱う日本の家庭科教科書は家族に関する記述が全体の7%未満であり、アメリカはその2倍を占めている。この章は前章でコミュニケーションの方法を理解させ、それを一番身近な家族に応用する実践的・体系的な内容になっている。この章は大項目(1)「家族の形態」(2)「家族の機能」(3)「家族の役割と責任」(4)「家族周期」(5)「家族が直面する変化」(6)「家族関係」からなり、これらはそれぞれ小項目がある。日本教科書と比較し、表2に示した。

表2 アメリカ教科書 第5章「家族」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	他者との関係とその構築方法	日本教科書該当項目
アメリカ	第5章「家族」	家族の形態	核家族	核家族とは結婚して子供がいない家族や両親と子供がいる家族のことである。両親や子供だけから成る家族なので、お互いに依存し合う。叔父や叔母や祖父が近くにいない。指導や支援がすぐにはできない可能性がある。	なし
			片親家族	片親家族とは一人の親と一人以上の子供から成る家族である。親は離婚したか、先に死亡したかである。片親は父親と母親の両方の役割を担わなければならないし、家族の精神的・財政的な支えを与えなければならない。死亡や離婚によって片親家族となった場合、家族のメンバーに感情的な大きなストレスが生じる。働く親は幼い子供の世話をするために時間を調整しなければならない。片親は子供と過ごす時間を見つける必要がある。	なし
			再婚家族	再婚家族とは片親になった人が結婚し、少なくともどちらかが再婚前の子供を連れていることである。子供たちは片方の親と血がつながっていない。この二つの家族が一つの家族になることは新しい挑戦であり、子供はほかの子供や親と家庭を分け合うことを学ぶ必要がある、その調整は毎日の仕事とされなければならない。両親にとって再婚は新しい人生のスタートである。お互いの愛はすべての家族との距離を密接に近づけていく。それぞれの家族のメンバーの長所が全体の家族に役立てることが出来る。	なし
			拡大家族	拡大家族とは両親と子供とほかの人が一緒にひとつの家で暮らすことである。他の人とは祖父や叔父や叔母やいとこなども含まれる。昔は今より拡大家族が多かった。もし、祖父母と一緒に暮らしているならば、さまざまなことで助けられる。支えやアドバイスをしてくれるし、両親が働きに出ている間、子供の面倒を見てくれる。ほかの大人が忙しいときに話を聞いてアドバイスをしてくれる。祖父母もまた、一緒に暮らしていることによって、出費が減らせたり、子供や孫の友達と交友が持てる。もし、病気になったとき、家に誰かがいることで、安心することができる。片親家族になった場合に両親の元へ戻ってきて拡大家族になる場合がある。片親は新しい住居を見つけるために仕事を探したり、ほかの場所に住むための時間が必要である。そこで、祖父母はしばらくの間孫の面倒を見ることになる。	なし
	家族の機能	機能的な家族	機能的な家族	すべての家族が問題に直面する。強い機能的な家族とはさまざまな問題をお互いの尊敬やコミュニケーションを通して一緒に解決することである。家族のメンバーはそれぞれの役割と責任を果たすことで成り立っている。家族のみんながほかのメンバーに対し最大の努力をしている。機能的な家族はほかのメンバーを信じ、多くの時間を一緒に過ごしている。	なし
			家族と地域	強い家族関係があれば強い地域関係を作れる。平和的に問題を解決する方法を学んだ子供は、これらの技能を使って平和的に地域の問題を解決する。一方、お互いにけんかする家族のメンバーは問題解決能力を学ばないかもしれない。	KT-p178 KK-p168
	家族の役割と責任			家族の一員として役割を持っている。役割がほかの家族のメンバーとの関係を作り、これを実現することによって尊敬される。家族の役割は変化していく。たとえば、家族のメンバーが家を出たときあなたは新しい役割と責任を担うことになる。	なし
	家族周期			初期段階は結婚を決め、お互いが同じ家を構え、仲良くやっっていくようになる時期である。拡張期は親としての新しい役割を担うときに多くの調整することが出てくる時である。発展期は子供が学校へ行き、学校行事等で家族の多くの時間とお金を費やすときである。子供が家から離れる時期は結婚した当時のような多くの時間と自由があり、収入ももつとも多いときであるので、旅行や趣味に費やすことができる。老年期は健康を維持するために多くのお金と家族や友達からの助けを必要とする時である。家族は同じ時間を拡張期と発展期しか一緒にいることができない。	なし
	家族が直面する変化		家族の構造の変化	家族の構造の変化（片方の親の死亡によって、片親家族になること等）をしている間は家族のメンバーと一緒に助け合う必要があり、家族とは愛や関心や尊敬や他の人への思いやりを示し、具体的に直面する家族の構造に変化に対する対処法は多くの時間と忍耐を持つことである。	なし

		家族のメンバーの変化	人の変化に伴い、家族も多くの変化に直面する。病気や身体障害者や死亡した人の役割や責任は家族の他のメンバーによって引き受けられなければならない。病気の場合は一時的な変化であり、身体障害者の場合は永久的な変化を意味する。困難な変化(例えば、誰でも避けることのできない病気や事故や死等)に対応するため家族は一緒に働かなければならない。	なし	
		変化への対応	家族の変化には悲しい変化(例えば自動車事故や失業等、避けることのできない突然の変化)ばかりではない。変化への対応は4つある。1)変化を受け入れなさい。それを無視することは何の解決にもならない。2)家族と一緒にする必要があることの調整を話し合いなさい。3)変化に対して準備をしなさい。早い段階からできることが何かある。4)家族が直面している変化に対して積極的な態度を保ちなさい。	KT-p174 KK-p166	
	家族関係	両親との関係	十代のときは両親と緊張した関係になる。両親は時々あなたの変化をわからなくなるので、あなたの成長を心配に思う。そこで、両親はあなたのことを子どもとして扱い続ける。あなたはもっと自由になりたいと思うが、両親は自由を与えることが心配である。このような両親との緊張を和らげる方法が4つある。1)あなたとの関心ごとを分かち合いなさい。2)自分だけではなく他者に気を配りなさい。3)責任を持っていることを示しなさい。4)信頼される人間になりなさい。十代の子どもが生活の中でのめ事を上手く乗り越えたいと思うことは当然のことである。また、両親が子どものために最善を尽くしたいと思うことも当然である。愛や忍耐や尊敬を持って家族間の調和を維持させる必要がすべての家族のメンバーにある。	なし	
		兄弟関係	兄弟関係は仲良くなったり悪くなったり両方が起こる。兄弟は他の関係に見られない親密なものである。兄弟や姉妹は良好な友達になることができ、お互い楽しみ合ったり、考えや感情を分け合ったりすることができる。お互いが競争しようとして妬み・争いが生じる。良い兄弟関係には4つのポイントがある。1)兄弟が言っていることを聞きなさい。2)兄弟と問題や心配事を共有しなさい。3)兄弟の性格や性質を尊敬しなさい。4)兄弟関係を助ける家族の目標を家族のメンバーで協力して成し遂げなさい。協力はみんなと一緒に働き、これを分け合うことである。協力によって家族のみんながもっと楽しく安心できる生活を送ることができる。	なし	
		祖父母との関係	祖父母は特別な人である。祖父母と一緒に過ごす時間は非常に楽しいものとなり、祖父母を知ることは両親をさらに知ることになる。あなたは祖父母に自分の気持ちや問題を簡単に話すことができる。祖父母は両親よりも忙しくないかもしれない。多くの時間と方法を持ってあなたを助けてくれる。思いやりのある祖父母はあなたの問題を解決するために多くの助言や指導を与える。祖父母は年をとるにつれて、いつもの活動ができなくなってしまうかもしれない。あなたや家族の世話がが必要になる。あなたの家に動けなくなった祖父母が引越してくるかもしれない。そのときは快く受け入れ、プライベートを確保できる場所を与えなさい。祖父母は病気で苦しむかもしれない。あなたの訪問や気遣いがとても大切になる。あなたが世話をするということによって、祖父母は敏活で居続けられるのであって、幸せであり続けられる。あなたと祖父母の関係は彼らとの時間を分かち合うときに強くなる。	なし	
日本家庭科KT	第9章「私たちと家族、地域」	家族と地域との関わりを考えよう	家庭生活と地域	私たちの生活の場には家庭や学校と、それらを取り巻く地域とがある。私たちは近隣の人と挨拶を交わしたり、幼児や小学生の頃には近くの公園で友達と遊んだり、地域の行事に参加していた。地域で様々な世代の人々と接することによって、お互いを理解するようになる。	KT-p178
		よりよい家族関係を考えよう	家族のつながり	家族が繋がりを強めるためには、お互いにそれぞれの立場を理解し、相手の気持ちを尊重することが大切である。家族の病気や事故等の家族に起こる変化が、家族のつながりを一層強くすることもある。よりよい家族関係を作るために、私たちも家族の一員として、努力や工夫をしてみよう。	KT-p174
日本家庭科K	第8章「私と家族・家庭と地域」	家庭生活と地域	地域の中で育つ	現代では、近隣の人々との関わりや地域との繋がりが意識されないことも少なくない。しかし、実際には、私たちは多くの人と繋がっており、地域の人や活動によって支えられて生活している。私たちは地域の中で様々な人と関わり、活動に参加し、成長することができる。子どもから高齢者までが安心して生活できるように、地域にどのような活動を作り出していくのか考えることが必要である。	KK-p168
		私と家庭生活	よりよい家族関係を作る	生活を共にしている家族は、気持ちが通じ合い、遠慮しないでつき合える関係であることが多いが、いつも穏やかで和やかな関係であるわけではない。時には意見が対立したり、けんかしたり、互いを嫌いになることもある。特に、生活上の危機に出会ったり、誰かが病気をしたり、誰かの気持ちが不安定になったりなど、様々な生活上の問題が起こったときには家族関係に影響を与えることもある。そのときには、家族で話し合ったり助け合ったりしていくが、親戚の人や友人や地域の人たちや相談所の人々など、家族以外の人に助けってもらうことも必要である。	KK-p166
日本保健体育HD	なし	なし	なし	なし	なし
日本保健体育HT	なし	なし	なし	なし	なし



## (1) 「家族の形態」

異なった家族のタイプが多くあり、集団を構成する家族のメンバーによって家族の形態は決まる。それが「核家族」、「片親家族」、「再婚家族」、「拡大家族」である。

### i) 「核家族」

ここでは、「核家族とは結婚して子どもがいない家族や両親と子どもがいる家族のことである。」「両親や子どもだけからなる家族なので、お互いに依存し合う。」「叔父や叔母や祖父母が近くにいない。指導や支援がすぐにできない可能性がある。」とあるように核家族の構成を説明し、それに伴う問題点を指摘している。授業展開を考えると、疑似家族を設定し、介護ができない場合や近所に親戚がいない場合の解決策を考えさせたい。

### ii) 「片親家族」

この中で、「片親家族とは一人の親と一人以上の子どものからなる家族である。」「片親は、父親と母親の両方の役割を担わなければならないし、家族の精神的・財政的な支えを与えなければならない。」「死亡や離婚によって片親家族になった場合、家族のメンバーに大きな精神的なストレスが生じる。」「働く親は幼い子どもの世話のために時間を調整しなければならない。片親は子どもと過ごす時間を見つける必要がある。」と記載され、片親とは仕事と家事の両方を一人で担っていることを理解させたい。授業では、幼い子どもを登場させ、仕事で疲れていてもお風呂に入れてあげたり、本を読んであげるケアが必要であり、長男や長女は責任感が必要であることを理解させたい。

### iii) 「再婚家族」

ここでは「子どもは片方の親と血が通っていない家族である。」「この二つの家族が家族のメンバーになることは新しい挑戦であり、子どもは他の子どもや大人と家庭を分け合うことを学ぶ必要がある、その調整は毎日の仕事とされなければならない。」「再婚した両親のお互いの愛は全ての家族の距離を親密に近づけていく。」と書かれている。再婚家族が一つの家庭を分け合う大変さや新しい家族との融和のために自分の家族をまず大切にすることが必要であることを学ばせたい。授業展開を考えると、中学生は再婚家族に対してマイナスイメージを持っていると考えられる。そこで、再婚家族を理解させるために家族構成を考え、演じてもらう。その家族にはどのような問題が生じ、どのように解決すればいいのかを考えさせる。まず、自分の親との親密な関係が再婚家族との融和に繋がることを学ばせたい。

### iv) 「拡大家族」

この中で「拡大家族とは両親と子どもと他の人が一緒に一つの家で暮らすことである。他の人とは祖父母や叔父や叔母やいとこなども含まれる。」「もし、祖父母と一緒に暮らしているならば、様々なことで助けられる。支えやアドバイスをしてくれるし、両親が働きに出ている間、子どもの面倒を見てくれる。」「もし病気になった時、家に誰かがいることで、安心することができる。」と加えられている。ここでは、祖父母が家にいることの良い点を理解させたい。このことを通して高齢化についても考えさせたい。授業展開を考えると、幼児を一人で育てている親になってもらい、仕事にいかなくてはならないときに誰に面倒を見てもらうかを考えさせる。自分もいつかは高齢者になるという観点から、生徒に祖父母にしてあげたいことは何かなどを考えさせたい。

## (2) 「家族の機能」

家庭の主な機能は3つある。一つ目は衣食住を含む身体的に必要なものの提供である。二つ目は社会的な機能を果たすことである。これは両親が子どもに正しい振る舞いをさせることで

ある。三つ目は家族に対する精神的なものを提供することである。大項目は「機能的な家族」、「家族と地域」の小項目から成っている。

#### i) 「機能的な家族」

ここでは、「全ての家族が問題に直面する。強い機能的な家族とは様々な問題をお互いのコミュニケーションを通して一緒に解決することである。」「家族のメンバーはそれぞれ役割と責任を果たすことで成り立っている。」「機能的な家族は他のメンバーを信じ、多くの時間を一緒に過ごしている。」と書かれている。ここでは、このような機能的な家族になるためにコミュニケーション能力を身につけさせたい。授業展開を考えると、疑似家族を設定し、一つの家族はメンバーがばらばらで時間を共に過ごさない家族であり、二つ目の家族は役割分担もできており一緒に時間を過ごしている家族を演じさせる。その後、これらの家族の長所や短所を話し合わせ、どちらが機能的な家族であるのかを考えさせたい。

#### ii) 「家族と地域」

この中で、「強い家族関係があれば強い地域関係を作れる」とある。昭和22年学習指導要領『はじめのことば』<sup>2)</sup>において、「家庭は社会の基礎単位であるので、次の時代にみんなが平和的な生活をするかを決定する男女の性格を培っている。家庭科の教科目標の中に家族関係の研究は必要欠くべからざる過程とすべき」とある。強い家族関係は強い地域環境を形成することを学ばせたい。家族とコミュニケーションをとる人は地域の人とのコミュニケーションをとることができるはずである。また、家庭の仕事をしている人は家庭だけではなく地域にも友好的であることを理解させたい。日本の家庭科教科書KTでは、「地域で様々な人と接することによって、相互理解になる。」とあり、日本の家庭科教科書KKでは、「地域にどのような活動を作り出していくのか考えることが必要である。」とし、家族関係が地域の発展に繋がるとは書かれていない。

#### (3) 「家族の役割と責任」

この中で、「家族の一員として役割を持っている。役割が家族の他のメンバーとの関係を作り、これを果たすことによって尊敬される。」と書かれている。家族関係を円滑にするために家族の一日の行動を振り返らせたい。例えば、家事が母親の過剰な役割と責任になっていないか、また過剰な負担の場合はどのように変化させたらいいのかを提案させる。役割や責任が家族の一員として家族関係をよくする基本となることを理解させたい。

#### (4) 「家族周期」

家族周期には両親が結婚決めた初期段階、子どもを持つと決めた拡張期、子どもが学校に行き始める頃の発展期、子どもが家から離れる時期、老年期の5つの期間がある。その中で、「家族は同じ時期を拡張期と発展期しか一緒にいることができない。」と書かれている。つまり、生徒が自分の家族と過ごす時間の少なさが強調されている。中学生には家族とコミュニケーションする時間や家族と過ごす時間の少なさを理解させ、有限であることに気づかせたい。授業展開を考えると、家族と一日に話す時間を確認させ、18才までどのくらいの時間を家族と過ごすことができるかを計算させることで家族と過ごす時間の少なさを把握させ、家族とのコミュニケーションの時間を増加させたい。

#### (5) 「家族が直面する変化」

家族周期を過ごしていくにつれて、多くの変化が起きる。これらの変化は普通のことであり、ほとんどすべての人がこの変化を通過していく。この大項目では「家族の構造の変化」、「家族のメンバーの変化」、「変化への対応」の小項目から成っている。

### i) 「家族の構造の変化」

ここでは、「家族の構造の変化（片方の親の死亡によって、片親家族になること等）をしている間は、家族のメンバーは一緒に助け合う必要があり、家族とは愛や関心や尊敬や他の人への思いやりを示し、多くの時間と忍耐を持つことである。」と書かれている。中学生がこのような変化に対応することができるように、知識と具体的解決方法を示す授業展開をしたい。例えば、急な変化に対して、家族とのコミュニケーションを通して時間をかけて協力していくことが必要であることを理解させたい。

### ii) 「家族のメンバーの変化」

ここでは、「人の変化に伴い、家族も多くの変化に直面する。」「病気や死亡した人の役割や責任は家族の他のメンバーによって引き受けなければならない。」家族のコミュニケーションと同時に生徒に病気や死について考えさせる授業展開をしたい。例えば、自分の家族のメンバーが病気になったとしたら家族はそれぞれどのような行動をしたらよいかをロールプレイングさせる。自分のしたいことをするのではなく、家族を介護するために自分自身が調整していくことが必要であることを学ばせたい。

### iii) 「変化への対応」

ここでは、「変化への対応は4つある。\*変化を受け入れなさい。それを無視することは解決にならない。\*家族と一緒にする必要があることの調整について話し合いなさい。\*変化に対して準備をきなさい。早い段階からできることが何かある。\*家族が直面している変化について積極的な態度を保ちなさい。」と書かれてあり、財政の破綻すなわち仕事がない状態は家族と一緒にいることができる大切な時間であるという前向きな考え方を示している。授業展開を考えると、疑似家族を設定し、家族の一員（働き手である父親）が自動車事故にあった場合の対応策を考え演じてもらう。例えば、家族全員の節約が考えられる。日本の家庭科教科書KTの第9章「私たちの家族、地域」の「家族のつながり」では、「家族の病気や事故等が家族のつながりを強くする。よりよい家族関係を作るために、努力や工夫をしよう。」とあった。日本の家庭科教科書KKの第8章「私と家族・家庭と地域」の「よりよい家族関係を作る」では、「様々な生活上の問題が起こったときは家族に影響を与える。家族で話し合い、友達や地域の人に相談すること。」とあったが、具体的解決方法が書かれていなかった。

## (6) 「家族関係」

家族関係とは人間同士の特別な絆や繋がりである。他人と上手くやる方法を学べば自分自身について勉強になる。最も多くの人が最初の関係を持つのが両親である。家族のメンバーとの関係が生涯を通じて続く。この「家族関係」は「両親との関係」、「兄弟関係」、「祖父母との関係」の小項目から成っている。

### i) 「両親との関係」

ここでは、「十代のときは両親と緊張した関係になる。両親は時々あなたの変化がわからなくなるのであなたの成長を心配に思っている。そこで、両親は自由を与えることが心配である。」「このような両親との緊張を和らげる方法が4つある。\*あなたとの関心事を分かち合いなさい。\*自分だけではなく他者に気を配りなさい。\*責任を持っている事を示しなさい。\*信用される人間になりなさい。」「十代の子どもが生活の中でのめめ事を上手く乗り越えたいと思う事は当たり前のことである。また、両親が子どものために最善を尽くしたいと思う事も当然である。」とある。中学生は、子どもから大人への移行期であり、第二次反抗期が始まる時期である。両親と子どもが上手くいく、いかないの要因とその解決方法を学ばせたい。授業展開として、ド

ラえもんのジャイアンとお母さんの会話をビデオで見せる。会話は「店の手伝いをしなさい」というものである。そこで、お母さんが店の手伝いをさせる理由とジャイアンが手伝いをしたくない理由を考えさせる。店の手伝いをすることによってジャイアンは家の仕事の責任を果たすことになる。双方の生活時間の調整が必要である。両親との不和は当たり前のことであり、どの家庭にも存在する。しかし、その不和が生じる要因や親、子ども双方の立場を理解することで、両親との仲がよくなることを学ばせたい。

## ii) 「兄弟関係」

ここでは、「兄弟関係は仲良くなったり悪くなったりの方が起こる。」「お互いが競争しようとして、ねたみ・争いが生じる。」「良い兄弟関係には4つのポイントがある。\*兄弟が言っていることを聞きなさい。\*兄弟と問題や心配事を共有しなさい。\*兄弟の性質や性格を尊敬しなさい。\*兄弟関係を助ける家族の目標を成し遂げるために家族のメンバーが協力しなさい。」とある。兄弟姉妹は異年齢集団の人間関係づくりとしてとらえる事ができる。しかし、少子化や情報化により、人間関係が同年齢の集団という狭い範囲に限られ、人との付き合い方を身につける機会が失われてきている。だからこそ、中学生に兄弟関係を理解させ、家族のコミュニケーションを深めさせたい。授業展開を考えると、兄弟のいる家族の様子をロールプレイングさせる。けんかや助け合う場面が多くあることを実感させたい。兄弟とは家族関係をよくするために協力することが必要であり、調和や不和を繰り返しながら友好的な関係が結べる大切なものであることを学ばせたい。そのためには、兄弟間のコミュニケーションが必要であると気づかせたい。

## iii) 「祖父母との関係」

ここでは、「あなたは祖父母と一緒に過ごす時間は非常に楽しいものとなり、祖父母を知るとは自分の両親をさらに知ることになる。」「あなたは祖父母に自分の感情や問題を簡単に話すことができる。」「思いやりのある祖父母はあなたの問題について解決するための助言や指導を提供する。」「あなたの家に動けなくなった祖父母が引っ越してくるかもしれない。そのときは快く受け入れ、祖父母のプライバシーを確保できる場所を与えなさい。」「あなたと祖父母の関係は彼らとの時間を分かち合うときに強くなっていく。」と書かれている。両親と不和になった時、祖父母に悩みを話すことによって解決してくれることを学ばせたい。祖父母が入院している家族を設定する。祖父母は良きアドバイザーであると同時に、自分が祖父母に対してもケアをしていくことが必要であることを理解させたい。

## 3) 「友達」<sup>11)</sup> について

この章は他者とのコミュニケーションについて最後に学習する。「家族はあなたにとって特別な存在であるが、友達はもっと重要になってくる。家族よりも多くの時間を一緒にいたいと思うかもしれない。」とあり、家族と同様に大切な他者であると位置づけている。この章は大項目(1)「友達とは何か」(2)「友達を作ること」(3)「友情が終わること」(4)「仲間や仲間の圧力」(5)「デート」からなり、これらはそれぞれの小項目がある。日本教科書と比較し、表3に示した。

表3 アメリカ教科書 第6章「友達」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	他者との関係とその構築方法	日本教科書該当項目
アメリカ	第6章「友達」	友達とは何か	友達のタイプ	誰もが友達を持っている。友達の中には知人と呼ばれる人がいる。知人とは君が会ったことはあるが、よく知らない人である。時間が経てば、知人は友達になるかもしれない。打ち解けた友達の多くは同様の趣味を分け合ったり、同様の活動を楽しんでいる。知人や打ち解けた友達は多く持っていそうであるが、たぶん2、3人の非常に親密な友達を持つことになるだろう。最良の友達とは最も密接な友情に発展する。この友達は君の考え方や秘密を最も深く分け合う友人である。	なし
			友達の質	友達とはおそらく共通して4つの性質を持っているだろう。1) 友達とはたとえ間違いを起こしたときでさえ誠実である。友達がテストでカンニングをしたとき、それを是認しないが問題を持ったその友人を次ぎにカンニングすることがないように手助けをするだろう。2) 友達とはお互いのケアをするものである。もし、腹を立てる行動をしても、友達は感情を害することなしに立ち直るように言うことができるものである。3) 友達とは信頼することができる。もし、君が放課後友達に会おうねといったならば忘れることはない。というのは、君は自分のした約束を友人が信頼していることを理解しているからである。4) 友達とは信頼することができるものである。自分の考えを他者に話し、分け合う場合、友達として自分が話したことについて友達は他の誰かに話さないことを知っているし、君の考えを笑わないし、からかわない。	なし
			友達になること	友達になるためには、あなたが友達にもらった忠誠や思いやりや信頼を彼らに同じようにすべきである。いったん友情が形成されると、強くしたり育てたりするために友情を育む必要がある。コミュニケーションは友達と上手くやっていくのを助ける。機嫌をコントロールし、傷つくことを言わないように注意すべきである。友達になることは、友達の意見に関係なく友達を喜んで受け入れなければならないことを意味する。いつも賛成しなくても良い。あなたは友達に嫉妬や独占欲を持つことなしに、友達が他の友達を持つことを許さなくてはならない。親友はいつもあなたがしたいことをしたいとは限らないので、他のことをする自由を与えなければならない。	なし
		友達を作る	友達を見つける	どこでも友達を見つけることができる。友情はすぐにはできない。あなたは友人関係を発展させるために多くの時間を要する。方法として、共通の趣味や考えを持っているか発見しなさい。知り合いをよく知ることは面倒のように思うかもしれないが生涯続く親密な友情を作ることは努力に値する。	なし
			親密になる	親密になることは新しい友達を作る最も簡単な方法の一つである。共通の趣味を分け合うとき友達になることは容易である。絆を強くすることについて話すことが必要になる。同様に、友達と他の趣味を見つけるかもしれない。	なし
		自己紹介をする	君が赤ちゃんであることを学んだとき第一歩が最も難しく、それ以降は簡単だったはずである。同じことが人々と会うことでも起こる。特に恥ずかしがる人に対して多くの人と会うことは難しい。このような人々は少し背中を押さなければならないかもしれない。会う人々（例えば、学校での親しい友）に親しくなることから始めると良いかもしれない。1) 笑顔でいることから始めなさい。誠実な笑顔によって、親しみや興味を示すことができるし、心地よく会話を始めることができる。2) 自己紹介をしなさい。君が興味があることを人に知らせなさい。「はい」「いいえ」以外を要求するような質問をしなさい。会う人に興味や趣味について尋ねなさい。例えば、宿題を一緒にするような親しい交際をするように試みてもいいし、お互いが知っていくようになるために学校行事と一緒に参加してもいい。	なし	
		ポジティブになりなさい	もし、ポジティブな態度なら新しい友人を作るのは簡単である。ポジティブであることは、人々の状況や良い面を理解していることを意味している。ポジティブである君は誰からも幸せであり、熱心であり、親しみがある。ポジティブな人々は周りであることが楽しい存在であり、いつも友人がいる。もし、自分が自分自身に良い感情を感じているならば友達も同じことを感じる。友達は君を好きになり、君が友達であることを嬉しく思うだろう。	HD-p59	
		友情が終わること	友情は時々永遠には続かない。その理由は2つある。一つ目は友達が成長するにつれて、共通の趣味が変わっていき、一緒に過ごすことが少なくなることである。二つ目は、個性が変化することである。不一致によって突然友情が終わってしまうことがある。秘密を漏らし、友達の噂を広めることは友情をおわらせることになる。友情を終わらせる前に、じっくりと話をしなさい。誤解しているかもしれない。おそらく謝罪ですべてが解決するだろう。親密な友情は悪い経験をもとにして終わらせるべきではない。	なし	
		仲間や仲間の圧力	ネガティブな仲間の圧力	ネガティブな仲間の圧力とは、自他共に害を与える振る舞いである。それを処理するために二つの方法がある。一つ目は、あなたの考えと違うことにはノーと言いなさい。次に、自分自身の言葉で話す練習をしなさい。	なし
			ポジティブな仲間の圧力	ポジティブな仲間の圧力は友好的な方法でああなたの振る舞いに影響を与える。グループのメンバーとして、グループの方針に合わせるために自分自身を改善しようとする。例えば、もし、あなたのグループのほとんどの学生が良い成績を得るならば、あなたも良い成績を得ようを一生懸命勉強するかもしれない。薬物乱用や過食症の友達が集団にいた場合、仲間はこのような友達の問題を一緒に解決しようとする。	なし

	デート	デートの段階	1) 十代の多くがグループでデートをすることを始める。これがグループデートである。リラックスして異性と打ち解けることができる。2) 異性のメンバーにより信頼関係を感じ始めるときに、グループではなく異性と二人でデートすることになる。これがカジュアルデートである。3) カジュアルデートをしている間に一定の基本的な人とデートするかもしれない。これがランダムデートである。カジュアルデートとランダムデートはいろいろな人と仲良くなるのに役立つ。4) デートを続けていく中で、他の人以上に仲良くなりたい異性が一人見つかるかもしれない。そのときお互いが相手とだけデートしたいと思い、この人とだけ一緒に遊んだりすることがステディデートである。お互いの友達と遊ぶことがあるので、まずはステディデートから始めるべきである。すべての友達がステディデートをする相手を持っており、友達もまたステディデートをすべきである。	なし
		最初のデート	最初のデートはすべての十代が神経質になる。しかし、デートを続けるにつれて、リラックスするようになる。自信がついてきて自分に対する心配が減り、相手のことを多く学ぶようになる。スムーズにデートするために10個の注意事項を挙げる。1) 自分らしくしなさい。2) お互いが楽しめることを選びなさい。3) 家を出る前に楽しい話を考えなさい。4) デートについて考える時間を多く作りなさい。5) 事故が起これば笑い飛ばしなさい。6) デートの事故が起これば相手に安心させなさい。7) キャンセルしてはならない。8) 時間を守り、遅れるときは連絡しなさい。9) 良い気分になりなさい。10) デートが終わったら、自分で詳細にデートを記録しなさい。	なし
		それは愛か	愛は二人の間の強い感情の反応である。愛は利己的ではなく、見せかけでもなくその総合的のものに対して感じるものである。夢中になることは時々、片思いと呼ばれ、十代には普通のことである。夢中になることは異性に対して新しい感情を探求する普通の方法である。これは愛と異なり、相手の欠点でさえ見過ごしてしまう。十代は性的な感情を持つことも普通のことである。しかし、そのリスクがあることを知ることは大切なことである。妊娠は性的交わりをしたときに生じる。女性は子どもを持つことを大人として楽しみにしているかもしれない。しかし、それは十代の生活を中断させることになる。子どもを持つ大人になるまで待つことは母子ともに健康を保証する最善の方法である。性的伝染病には2つある。これらのリスクがあるので、多くの若い人は禁欲をする。しかし、禁欲とはセックスをしないことではない。喜ばない妊娠や性的伝染病を避ける良い方法である。身体的でなくポジティブな気持ちをお互いに伝え合う方法がある。まず、お互いに好きであることを示す方法を考えなさい。次に両親がいないときは家に行くことは避けなさい。その代わりに、共通のクラブやグループに参加しなさい。次に、セックスをすることについてどう思っているのか決めなさい。ノーということを実行し、信じていることを守る準備をしなさい。	HD-p46a HD-p46b HD-p47
		別れること	破局する理由は一緒にいても楽しく思わなくなることである。よく話すことはストレスを少なくし、賢明に破局することができる。お互いの感情を考慮し、尊敬することは大切なことである。不親切な主張やお互いの罪悪感を持つことはお互いに害のあることである。寂しい感じよりはむしろ、自分自身を見つめる時間にしなさい。目標を立て、この目標にどのように向かうかを考えなさい。新しいスポーツをする技能を学びなさい。興味のある場所を訪れなさい。多くの時間を友達や家族と過ごしなさい。いつかは、破局の痛みが消えるだろう。あなたは成長や発達のために新しい友達を捜す。新しい友情はいつでも始めることができる。	なし
日本家庭科KT	なし	なし	なし	なし
日本家庭科K	なし	なし	なし	なし
日本保健体育HD	第1章「心身の発達と心の健康」	心の健康を保つためには	心の健康な人は、自分の強さと弱さを長所と短所を克服しようとして、前向きに努力している人だと言える。また、物事に対して、柔軟で広い視野を持つことやユーモアを持つことも心の健康にとって大切なことである。心と体の関係を理解して、ストレスに打ち勝つことができるたくましい心を育み、健康的に成長していこう。また、周りの人に対して、思いやりを持ち、協力し合って、誰もが心の健康を保てる世界を作る一員となるよう努力しよう。	HD-p59
		思春期の心の変化	異性への関心 私たちは一人一人個性が違い、男子、女子というように性が違う。思春期の頃は、その違いが気になったり、相手や自分自身をもっと知りたいと思うようになる。心と体の成長と共に、異性や性について強い興味を示すようになる。	HD-p46a
		性に関すること	強い性の欲求を感じることに、羞恥心や罪の意識等で悩む人がいるかもしれない。しかし、性について興味を持つことは人間として自然な感情の表れである。異性を好きだという気持ちは心を豊かにし、毎日を生き生きと過ごす活力を与えてくれる面がある。私たちは、友達やテレビ、雑誌等から性の知識を得ることができるが、それらは興味本位なものが多く、必ずしも適切な内容でないことがある。このような興味本位な性情報に流されることなく、理性的に判断し、行動する態度を持つことが大切である。性への欲求や行動は、女子よりも男子の方が積極的に直接的に表す傾向がある。異性との上手な接し方を身につけるために、お互いの性行動の違いがあることを理解しておくことも大切である。	HD-p46b
		自分を見つめて	性に関することは、単に体だけのことではなく、それを通して人とのつきあい方や自分らしさを理解することに密接に繋がっている。自分を見つめ、相手を理解して、高め合える人間関係を作っていくようにしましょう。	HD-p47
日本保健体育HT	なし	なし	なし	なし

## (1) 「友達とは何か」

様々な異なったタイプの友達がいる、それぞれ異なった性質を持っている。「友達とは何か」は「友達のタイプ」、「友達の質」、「友達になること」の小項目から成っている。

### i) 「友達のタイプ」

ここでは、「友人の中には知人と呼ばれる人がいる。知人とは、君が会ったことはあるけれどもよく知らない人である。時間が経てば、知人は友達になるかもしれない。」「打ち解けた友達の多くは同様の趣味を分け合い、同様の活動を楽しんでいる。知人や打ち解けた友達を多く持っていそうであるが、たぶん2、3人の非常に密接な友達を持つようになるだろう。」「最良の友達とは最も密接な友情に発展する。この友達、すなわち親友は君の考え方や秘密を最も深く分け合う友達である。」と書かれている。ここでは、初めて会ったときから親友と呼べる人であったかを考えさせることによって、知人→友達→親友の過程を経て行くことを理解させたい。

### ii) 「友達の質」

ここでは、「友達とはおそらく共通して4つの性質を持っている。\*友達とはたとえ間違いを犯したときでさえ誠実である。友達がテストでカンニングをしたとき、その友達が次にカンニングすることがないように手助けするだろう。\*友達はお互いをケアするものである。もし、腹を立てる行動をしても、友達とは感情を害することなしに立ち直るように言うことができるものである。\*友達とは信頼することができるものである。信頼とは、君が言ったことは実行することを意味する。もし、君が放課後、友達に会おうねと言ったらそれを忘れない。自分の考えを他者に話し、分け合う場合、自分が話したことについて友達は誰かに話さないことを知っているし、君の考えを笑わないし、からかわない。」とある。ここでは友達とは精神的な助けになるだけではなく親友のためを思って怒ることやその背景にある問題を一緒に解決していこうとするものであることを学ばせたい。授業展開ではカンニングすることはどういうことなのか考えさせる。一緒に勉強したりすることによってカンニングをする必要がないことを理解させたい。

### iii) 「友達になること」

この中で、「友達になるためには、あなたが友達にもらった忠誠や思いやりや信頼を彼らに同じようにするべきである。いったん友情が形成されると、強くしたり育てたりするために友情を育む必要がある。」「コミュニケーションは友達と上手くやっていくのを助ける。機嫌をコントロールし、傷つくことを言わないように注意するべきである。」「友達になることは、友達の意見に関係なく友達を喜んで受け入れなければならないことを意味する。いつも賛成しなくても良い。あなたは友達に嫉妬や独占欲を持つことなしに、友達が他の友達を持つことを許さなくてはならない。親友はいつもあなたがしたいことをしたいとは限らないので、他のことをする自由を与えなければならない。」とある。ここでは友達ができたときはどのような気持ちになったかを聞き、その後どのような気持ちになっていくのか考えさせたい。友達になることは嬉しいことであるが、仲良くなればなるほど独占欲が強まることに気づかせたい。独占欲からけんかが生じることがあることを理解させ、友達とのコミュニケーションをとることが解決方法になることを学ばせたい。

## (2) 「友達を作ること」

大項目「友達を作ること」は「友達を見つける」、「親密になること」、「自己紹介をする」、「ポジティブになりなさい」の小項目から成っている。

### i) 「友達を見つける」

ここでは、「どこでも友達を見つけることができる。」「友情はすぐにはできない。あなたは友人関係を発展させるために多くの時間を要する。方法として、共通の趣味や考えを持っているか発見しなさい。面倒のように思うかもしれないが、生涯続く親密な友情を作ることは努力に値する。」とある。授業展開を考えると、学級の友達の一人との今までの過程を振り返ってもらう。いつどこでどのように知り合いになり、友達と呼べる関係になったのかを確認させることによって、今の関係になったことに気づかせたい。

## ii) 「親密になること」

この中で、「親密になることは新しい友達を作る最も簡単な方法の一つである。」「共通の趣味を分け合うとき友達になることは容易である。絆を強くすることについて話すことが必要になる。同様に、友達と他の趣味を見つけるかもしれない。」とし、共通の趣味を持つことに注目させている。授業展開を考えると、友達関係になる過程を振り返ったときに共通点を考えてもらう。特に部活動をしている生徒はチームワークの大切さを実感しており、結束された友情が存在する。

## iii) 「自己紹介をする」

ここでは、「会う人々（例えば、学校で）に親しくなることから始めると良いかもしれない。\*笑顔でいることから始めなさい。誠実な笑顔によって、人に親しみや興味を示すことができるし、心地よく会話を始めることができる。\*自己紹介をしなさい。\*君が興味があることをその人に知らせなさい。\*「はい」「いいえ」以外を要求するような質問をしなさい。」とあり、友人関係を構築する第一歩は笑顔でいることや自己紹介をすることや相手に話をしてもらえよう質問することが方法として述べられている。授業展開を考えると、中学生に自己紹介をさせたい。そのときに、笑顔でいることが相手に好感を持ってもらえ、相手に対して話をしてもらえようになることを気づかせたい。

## iv) 「ポジティブになりなさい」

ここでは「もし、ポジティブな態度なら新しい友人を作るのは簡単である。ポジティブであることは、人々の状況や良い面を理解していることを意味している。ポジティブである君は誰からも幸せであり、熱心であり、親しみがある。」「ポジティブな人々は周りにいることが楽しい存在であり、いつも友人がいる。」とある。ここでは、中学生は子どもと大人の間点にあるからこそポジティブになることを学ばせたい。授業展開を考えると、ポジティブな友達と一緒にいることの良い面を考えてもらう。そうすることによって、自分自身もポジティブな人間になりたいと思うようにさせたい。日本の家庭科教科書にはないが、保健体育教科書にある。保健体育教科書HDの第1章「心身の発達と心の健康」の「心の健康を保つためには」では、周りの人に対する思いやりや協力することや物事に対して柔軟で広い視野を持つことなどが記載されている。

## (3) 「友情が終わること」

このなかで、「友情は時々永遠には続かない。理由は2つ。一つ目は友達が成長するにつれて、共通の趣味が変わっていき、一緒に過ごすことが少なくなることである。二つ目は、個性が変化することである。」「秘密を漏らし、友達の噂を広めることは友情を終わらせることになる。」「友情を終わらせる前に、じっくりと話をしなさい。誤解しているかもしれない。おそらく謝罪ですべてが解決するだろう。親密な友情は悪い経験をもとにして終わらせるべきではない。」とある。授業では、友情が終わる前に未然に防ぐ方法を学ばせたい。例えば、秘密を漏らしたことが原因でけんかをしている友達を登場させる。そのとき、どのような方法でけんかをやめ



て仲直りするのか考えさせる。誤解を解くためにどのような言葉や態度をしたらよいのか、秘密を漏らしてしまった理由を尋ねたりすることや謝ることが重要であることに気づかせたい。また、このようなけんかをしたからといって安易に友情を終わらせることはないことを実感してもらいたい。

#### (4) 「仲間や仲間の圧力」

仲間とは同じ年代の人で、生活に影響を与える人である。その仲間の圧力は考えや行動に影響を与える。大項目「仲間や仲間の圧力」は、「ネガティブな仲間の圧力」、「ポジティブな仲間の圧力」の小項目から成る。

##### i) 「ネガティブな仲間の圧力」

この中で、「ネガティブな仲間の圧力とは、自他共に害を与える振る舞いである。」「それを処理するために二つの方法がある。一つ目は、あなたの考えと違うことにはノーと言いなさい。次に、自分自身の言葉で話す練習をきなさい。」とある。中学生は仲間の圧力に対して、はっきり自分の考えを言うことができにくい。ここでは、友達関係が崩れることを恐れずに密接な友達関係を築くための方法を学ばせたい。授業展開を考えると、アニメのドラえもんにおいて、ジャイアンから「のび太、俺の宿題をやれ。」と命令されているのび太に対してノーと言える手紙を書かせる。その手紙は、自分が使う言葉で表現してもらい、自分が実際そのような立場であると仮定することで、このような友達からの圧力に対応できる力を身につけさせたい。

##### ii) 「ポジティブな仲間の圧力」

ここでは、「ポジティブな仲間の圧力は友好的な方法であなたの振る舞いに影響を与える。」「薬物乱用や過食症の友達が集団にいた場合、仲間はこのような友達の問題を一緒に解決しようとする。」とある。ここでは、仲間の圧力の良い面を理解させ、悪い仲間の圧力をも集団でプラスにしていくことが重要であることを学ばせたい。授業展開を考えると、もし、薬物乱用をしている友達がいた場合、友達としてどのような対応をするのか考えさせたい。間違ったときに仲間の圧力によって間違いを直すようにしむけ、仲間であることの必要性を理解させたい。

#### (5) 「デート」

デートとは異性の友達と一緒に活動に参加することである。大項目「デート」は「デートの段階」、「最初のデート」、「それは愛か」、「別れること」の小項目から成る。

##### i) 「デートの段階」

デートには4つの段階がある。1) 十代の多くがグループでデートをすることを始める。これがグループデートである。リラックスして異性と打ち解けることができる。2) 異性のメンバーにより信頼関係を感じ始めるときに、グループではなく異性と二人でデートすることになる。これがカジュアルデートである。3) カジュアルデートをしている間に一定の基本的な人とデートするかもしれない。これがランダムデートである。カジュアルデートとランダムデートはいろいろな人と仲良くなるのに役立つ。4) デートを続けていく中で、他の人以上に仲良くなりたい異性が一人見つかるかもしれない。そのときお互いが相手とだけデートしたいと思い、この人とだけ一緒に遊んだりすることがステディデートである。」このようなデートによって異性との友達づくりができることを気づかせたい。

##### ii) 「最初のデート」

ここでは、「スムーズにデートするために10個の注意事項を挙げる。\*自分らしくきなさい。\*お互いが楽しめることを選びなさい。\*家を出る前に楽しい話を考えなさい。\*デートについて考える時間を多く作りなさい。\*事故が起こったら笑い飛ばしなさい。\*デートの事故が

起こったときは相手に安心させなさい。\*キャンセルしてはならない。\*時間を守り、遅れるときは連絡しなさい。\*良い気分になりなさい。\*デートが終わったら、自分で詳細にデートを記録しなさい。」とある。授業展開を考えると、初めてのデートをするときの気持ちを考えさせ、注意事項は異性を問わず同性の友達づくりでも同じであることに気づかせたい。それは相手から見れば誠実さになることも、ここでは気づかせたい。

### iii) 「それは愛か」

この中で、「愛は二人の間の強い感情の反応である。愛は利己的ではなく、見せかけでもなく、総合的のものに対して感じるものである。」「夢中になることは時々、片思いと呼ばれ、十代には普通のことである。夢中になることは異性に対して新しい感情を探求する普通の方法である。これは愛と異なっており、相手の欠点でさえ見過ごしてしまう。」とあり、夢中になることと愛することは異なり、冷静に判断できる力を身につけさせたい。また、「十代は性的な感情を持つことも普通のことである。しかし、そのリスクがあることを知ることは大切なことである。妊娠は性的交わりをしたときに生じる。女性は子どもを持つことを大人として楽しみにしているかもしれない。しかし、それは十代の生活を中断させることになる。子どもを持てる大人になるまで待つことは母子ともに健康を保証する最善の方法である。」「性的伝染病には2つある。これらのリスクがあるので、多くの若い人は禁欲をする。しかし、禁欲とはセックスをしないことではない。喜ばない妊娠や性的伝染病を避ける良い方法である。身体的でなくポジティブな気持ちをお互いに伝え合う方法がある。まず、お互いに好きであることを示す方法を考えなさい。次に両親がいないときには家に行くことは避けなさい。その代わりに、共通のクラブやグループに参加しなさい。次に、セックスをすることについてどう思っているのか決めなさい。ノーということを練習し、信じていることを守る準備をしなさい。」とあり、異性に対する感情は普通のことであり、それに伴うリスク（妊娠・性感染症）や異性とのつきあい方について具体的方法を説明している。ここでは、中学生は異性に興味を持ち始める時期だからこそ、愛についての基本的事項や発展事項を学ばせたい。人を愛すると異性に対してどのようなことをするのか恋愛ドラマを見せて考えさせる。中学生にとってセックスやキスについては既知であるが、その行為はリスクがあることに気づかせたい。そのリスクに対してどのような対処法があるのか考えてもらい、愛情表現を考えさせたい。日本の家庭科教科書にはないが、保健体育にはあった。日本の保健体育HDでは、「思春期の変化」の中の小項目「異性への関心」では異性についての理論的な文章がある。「性に関すること」では、お互いの性行動に違いがあることや異性との上手な接し方を身につけることなどがあるが、具体的なつきあい方は示されていない。「自分を見つめて」では、「自分を見つめ、相手を理解して、高め合える人間関係を作っていけるようにしよう。」とある。日本の家庭科では妊娠のメカニズムや出産などを保育の領域で扱うが、異性とのつきあい方やリスクなどの具体的な記載はない。

### iv) 「別れること」

ここでは、「破局する理由は一緒にいても楽しいと思わなくなることである。」「誠意をもって話すことはより少ないストレスの別れをすることができる。」「お互いの感情を考慮し、尊敬することは大切なことである。不親切な主張やお互いの罪悪感を持つことはお互いに害のあることである。」「寂しい感じよりはむしろ、自分自身を見つめる時間にしなさい。目標を立て、この目標にどのように向かうかを考えなさい。新しいスポーツをする技能を学びなさい。興味のある場所を訪れなさい。多くの時間を友達や家族と過ごしなさい。いつかは、破局の痛みが消え去るだろう。あなたは成長や発達のために新しい友達を捜す。新しい友情はいつでも始め

ることができる。」とあり、破局する原因や破局を未然に防ぐための具体的解決方法が示されていた。異性に関心を持ち、異性とつき合うことだけを教えるのではなく、その関係が終わるときに一番良い方法で終われるような具体的解決方法を学習させたい。また、友達はかけがえのないものである。だからこそ、子どもと大人の狭間にある中学生にとって、その関係が終わっても友達として大切な存在であることを認識させたい。

### Ⅲ おわりに

「心の教育」には人間関係の構築が必要であり、コミュニケーション能力の育成が重要視されている。人間関係や家族関係の今日的課題とは何か。それは生じた課題に対して自分だけで悩み、突飛な行動＝暴力、殺人、自殺などに及んでしまうことである。この課題解決に今回の章「他者とのコミュニケーション」、「家族」、「友達」の内容全体が役立つ。

1) 「他者とのコミュニケーション」で、言語・非言語的コミュニケーションがあり、その意味、明確なコミュニケーションの方法が示されていた。

2) 「家族」では、いわゆる家庭の精神的機能について示されていた。機能的な家族とはお互いに役割があり、その責任を果たすとともに、様々な問題が生じた時にお互いのコミュニケーションを通して一緒に解決すること、このことが家族の絆を強くすることが示されていた。一方、日本の家庭科ではこのような問題に対し、よりよい家族関係をつくるために努力しようのような道徳的な記述であり、具体的ではなかった。

3) 「友達」では、友達の質、友達の作り方などが書かれ、他者との人間関係構築の意味、大切さが述べられていた。ここでは、悩みとは自分だけで抱えるものでなく、友達と分かち合うものであることを学習でき、このことが自分の殻に閉じこもってしまう中学生にとっては大きな救いになる。また異性との性交渉についても学習させていた。そこには医学的な側面から十分注意する旨の内容があり、説得力があった。一方、保健体育では「自分を見つめ、相手を理解して高めあえる人間関係を作っていけるように」のように異性とのつきあい方については全く示されておらず、説得力が乏しい内容であった。

青少年による家庭内暴力、人間関係のつまずき、引きこもりなど日本の今日的課題を解決していく方法は今回、アメリカの中学校家庭科教科書で見たように具体的かつ体系的内容を他教科にまで分散させることなく、家庭科でまとめて学習させることが最も適切だと考えられる。今後、いままで述べてきた授業構想を実践していきたい。

### 参考文献

- 1) 中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/970801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970801.htm)
- 2) 文部科学省昭和22年 学習指導要領『はじめのことば』  
<http://nierdb.nier.go.jp/db/cos/s22ejh/index.htm>
- 3) 瀧本麻衣 入江和夫「アメリカ中学校家庭科教科書から見た「家族関係」の一考察（第1報）」  
第3章「直面していることへの変化」を「直面していることへの挑戦」と訂正
- 4) LA.Liddell&YS.Gentzler『Building Life Skills』（2003）THE DOODHEART-WILLCOMPANY.INC
- 5) 石田晴久ら『新しい技術・家庭（家庭分野）』（2003）東京書籍

- 6) 中間美砂ら『技術・家庭（家庭分野）』（2003）開隆堂
- 7) 宇土正彦ら『中学校保健体育』（2003）大日本図書
- 8) 高橋健夫ら『新しい保健体育』（2003）東京書籍
- 9) 4) pp.46-57
- 10) 4) pp.58-70
- 11) 4) pp-71-82